

掘割の巡るまち

柳川は市内のいたるところを掘割が縦横に巡っているため、昔から水郷と呼ばれてきました。現在川下りコースとなっている掘割は、江戸時代に柳川城主・田中吉政によって城の防御のために改修されたもので、その後も灌漑用水や生活用水として長く利用され、親しまれてきました。



川下り

全国的にも有名な川下りは、情緒ある景色を眺めながら、気ぜわしい日常から離れて、ゆったりとした時間を過ごすことができます。旧城下町を巡るコース上の城堀沿いには、掘割の巡るまち・柳川の歴史を感じさせる見所がたくさんあります。



すきさきどい 鋤崎土居 隅町 (MAP 2-②)

柳川古文書館前の掘割沿いに続く柳並木は、川下りコースのスタート地点でもあり、水郷柳川らしい情緒あふれる風景です。ここ鋤崎土居は、柳川城の惣外堀に沿って築かれた東方の城郭防衛の最前線だったところで、かつては高い土盛りがされ、大樹や竹やぶが生い茂る土塁でした。



水辺の散歩道(日本の道百選) 袋町～坂本町 (MAP 2-⑦)

袋小路から弥兵衛門橋まで川下り内堀コース沿いに整備された遊歩道は、昭和61(1986)年に国土交通省の「日本の道百選」に選ばれました。道中には柳城児童公園や水郷柳川の基礎を作った田中吉政の像、詩聖・北原白秋の歌碑などもあり、掘割沿いの静かな散歩道として親しまれています。



弥兵衛門橋 坂本町 (MAP 2-⑧)

柳川城三の丸に入る北の門の橋だったところで、流力をつけるなどの理由から下の方が狭く作られており、上流からの水を滞留させ緩やかに下流域を浸す「もたせ」の働きもしていました。現在の橋は昭和51(1976)年に原型どおり石組みをし直したもので、手すりも新たに付けられました。川下りコースの中でも一番川幅が狭いところとして、船頭さんの腕の見せ所となっています。



城堀水門 新町 (MAP 2-③)

二ツ川から柳川城内への取水口は3カ所ありますが、その1つであるこの水門は、城の防御用に築造された重厚な石積みで、現在でも川下りコースの城堀への入口として、当時の雰囲気を感じることができます。「水の城」ともいわれた柳川城は、万一の場合にはこの水門を閉め、上流の矢部川の堤防を切り崩すことにより、城下町以外の周辺部を水没させる防衛上の仕組みがあったといわれています。



水中庭園 新町 (MAP 2-④)

掘割を池のように見立て、お座敷のある建物の対岸につくられた庭は、おそらく昔はもっとあったと思われますが、今ではあまり見られなくなりました。汲水場と同様、堀に親んでいた柳川らしい風情がある景観で、新町の水中庭園は川下りの舟から見るすることができます。



出逢い橋付近 新外町・吉富町 (MAP 2-⑨)

街中を離れ、掘割の両岸に樹木がうっそうと繁る川下りコース終盤のこのあたりは、水と緑の情緒あふれる水郷柳川の代表的な景観です。沖端から外堀に向かう遊歩道に、松濤園へ渡る出逢い橋が架かり、散策コースとしても楽しめます。



殿の倉 新外町 (MAP 2-⑩)

殿の倉は、柳川藩主であった立花家に伝わる大名道具を展示する資料館ですが、川下りコースに面したなまこ壁は、終点近くのビュースポットでもあります。なまこ壁とそれが水面に揺られながら写る様子は風情があります。白秋の歌にも「殿のお倉」の白壁に映る水かげろうを詠んだ歌があり、水郷柳川らしい名所のひとつです。



並倉 三橋町江曲 (MAP 2-⑤)

赤レンガ造りの3棟並んだ倉は、大正時代に建てられた柳川特産の味噌の製造工場ですが、赤レンガがきらきらと水面に映え、堀岸の草木と共につくり出す美しい景観は、柳川を代表する名所のひとつとなっています。水郷柳川の歴史的景観形成に大きく寄与していることが評価され、平成12(2000)年には国の登録文化財となりました。



くみず(くみほ) 汲水場 細工町、新町など (MAP 2-⑥)

掘割沿いに見られる汲水場は、昭和初期までは飲み水を汲んだり、顔を洗ったり、実際の生活に利用されていたものです。掘割が日常生活の場であった、水郷柳川の昔の姿を垣間見ることができます。



沖端の船着場 沖端町・稲荷町 (MAP 2-⑪)

川下りの終点・下船場は、白秋の生まれた港町・沖端の中心地にあります。掘割の両側には柳がゆれ、名物の鯉屋やお土産物屋などが軒を連ねています。また、港に近い船着場奥の北岸には沖端水天宮があり、毎年5月の連休時は「水天宮祭」で賑わいます。